

ブन्द・キスタの

きみよう

しゃかく

奇妙な射角



「^{あく}悪の^{かくど}角度を^{うぬ}撃ち抜き、^{ぜん}善の^{ほうこう}方向に^か変えろ！」

名前

[illegible]

<プロローグ>

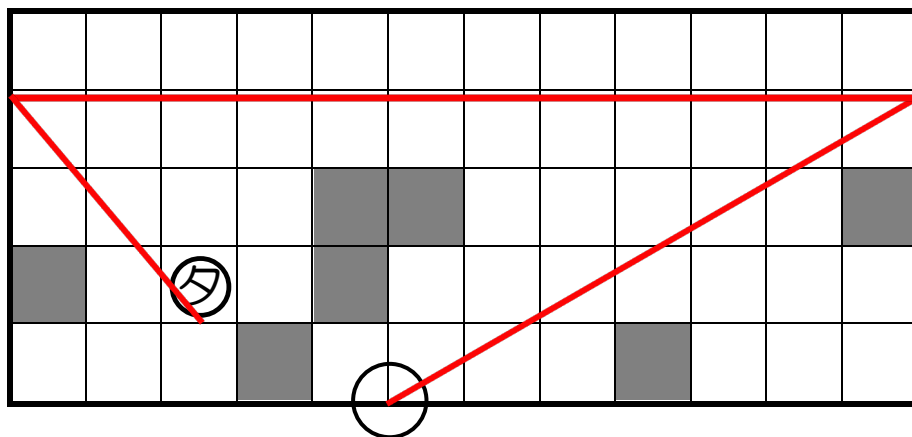
この街には、正義のヒーローはいない。
 空を飛ばやつも、変身するやつも、誰もいない。
 ただ——「角度」を直す男がひとりいる。
 名はブノード・キスタ。狙撃の腕は一級品。
 けれど、彼の弾丸は誰も傷つけない。彼の相棒は
 六体の小さなスタンド、ラビット・ピストルズ。
 ニンジン型の弾丸に宿る彼らは、
 悪人の“心の角度”を測り、修正するために生まれた。



街のどこかで、また誰かが道を外す。だが、キスタに
 にとってそれは悪ではない。“少しだけズレた角度”。

ただそれだけの話だ。

「俺の仕事は簡単だ。狙うのは、悪じゃねえ。心の角度だ。」ニンジン弾が放たれる
 たび、ひとりの悪人が、奇妙な善人へと変わっていく。それが、
 『ブノード・キスタの奇妙な射角』。——今日もまた、照準は静かに定まる。



- …スタート
(円の中の交点)
- ⊗…ターゲット
- …障害物

れい だんがん

例…弾丸：①30° , ③40° , ②90°

自分の位置の左右を0°とし、それに対して、弾丸の角度で線を引きます。

壁に当たった場合はそこで止まり、

壁を0°とし、新しい弾丸の角度で線を引きます。

弾丸を全て使い切り、ちょうどターゲットを通過することができればクリアです。

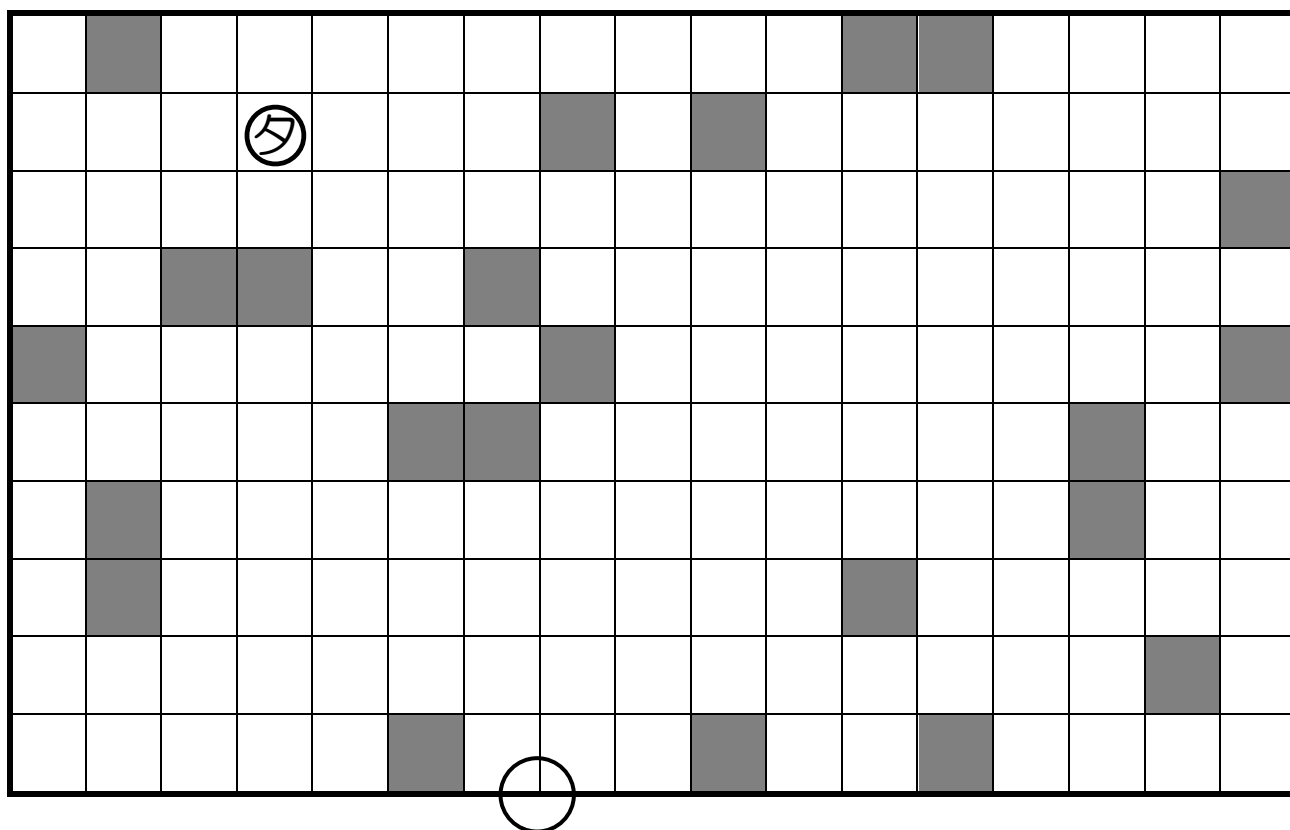
障害物に当たってはけません。

<EP1：しゃべるスピード、^{じそく}時速120 デシベル>

あさ まんいんでんしゃ しゃない ちゅうしん
朝の満員電車。車内の中心にいるのは一ケンタ。
イヤホンもつけずに^{おんがく}音楽を^{なが}流し、^{おおこえ}大声で^{わら}笑っている。
「うっそだろ!? マジで!? ハハハ!!」^{ほか}他の^{じょうきやく}乗客は
うつむき、^{しせん}視線だけで「^{しず}静かにしてくれ」と^{うった}訴えているが、ケンタは^き気づかない。いや、^き気づこうとしない…



^{こころ}心の^{かくど}角度がズれてるな。^{おれ}俺が^{はか}測り直してやる。」



^{だん}弾丸：25° ,35° ,45° ,50° ,65°



^{すうかげつご}数ヶ月後。

^{えき}駅の^{こうない}構内に、^{おだ}穏やかな^{ていおん}低音が^{ひび}響く。

「次は^{つぎ}一^{きたぐちほうめん}北口方面、^{かいそくでんしゃ}快速電車がまいります。」^{こえ}その声は、^お落ち着きがあり、^{あんしん}どこか安心する。かつて“うるさすぎた^{おとこ}男”は、いまや“^{つた}伝わる声”で^{こえ}人々を^{ひとひと}導いて^{みちび}いる。電車^{でんしゃ}が^{とうちゃく}到着するたび、^{じょうきやく}乗客の^{ひょうじょう}表情が^{すこ}少しだけ^{やわら}柔らかくなる。

「^{こえ}声の^{かくど}角度、^まぴったり 90° …ど^{なか}真ん中だな。」



<EP2：チャイムをスタート音と勘違いする走者>

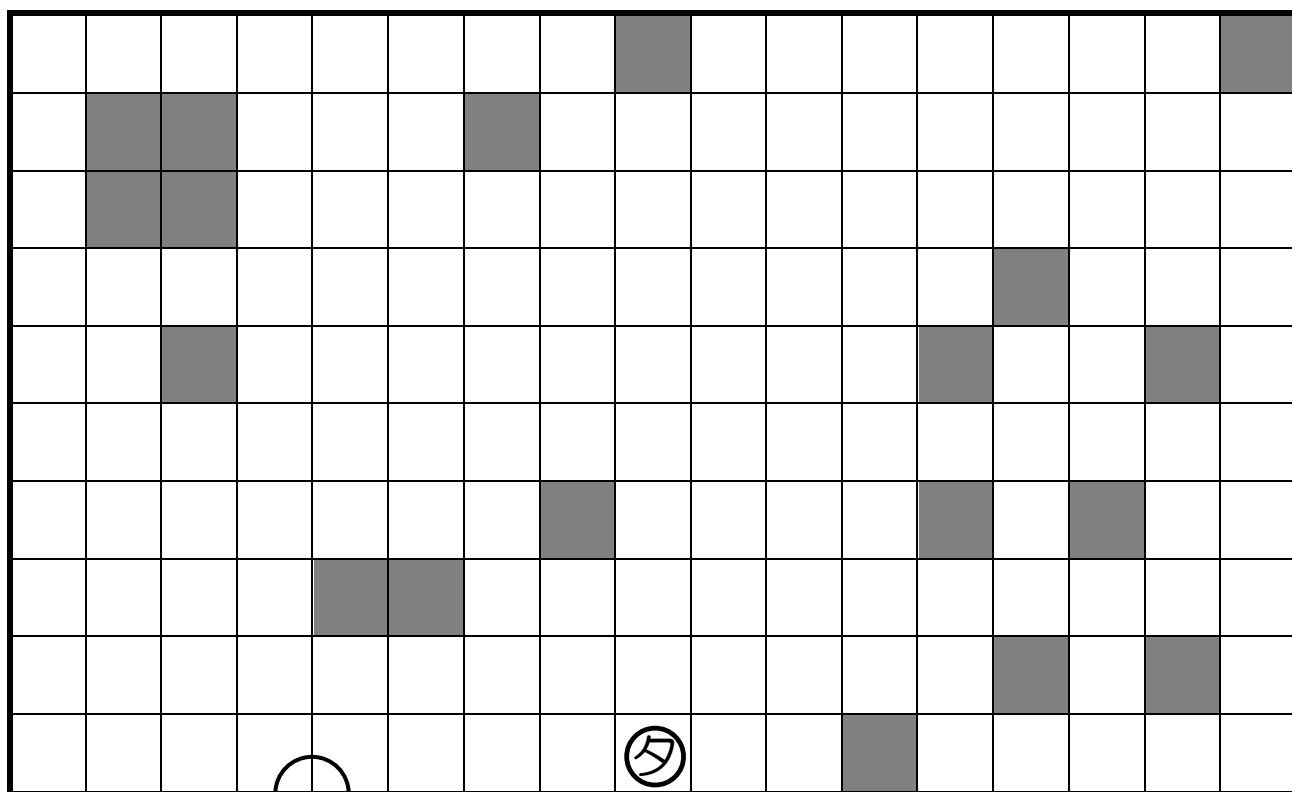
放課後の高校。チャイムが鳴るやいなや、誰よりも早く
ドアを飛び出す影がある。廊下を疾風のように駆け抜ける
常習犯だ。「私が一番風になるんだああ!!」

すれ違う生徒たちがよけ、先生が怒鳴る。

「走るなああああ!!」だが、風の中のカズミには届かない。
“私の速さを止められる奴なんていない。”

そんな誇らしげな笑み…

「心の角度がズれてるな。俺が測り直してやる。」



弾丸：15° ,35° ,55° ,65° ,75°

数ヶ月後。

朝日を背に受けて、駆け抜けるカズミ。今では高校駅伝
のアンカーを任される存在だ。彼女の走りは、速さだけ
でなく、仲間の想いを繋ぐためのものになっていた。

「任せて一風は、チームで吹かせるんだもの!」彼女の
走る姿はまるで、風そのもの。

だが今は、周囲の声を聞きながら進んでいる。

「風向き、完璧だな。もう誰も止める必要はねえ。」



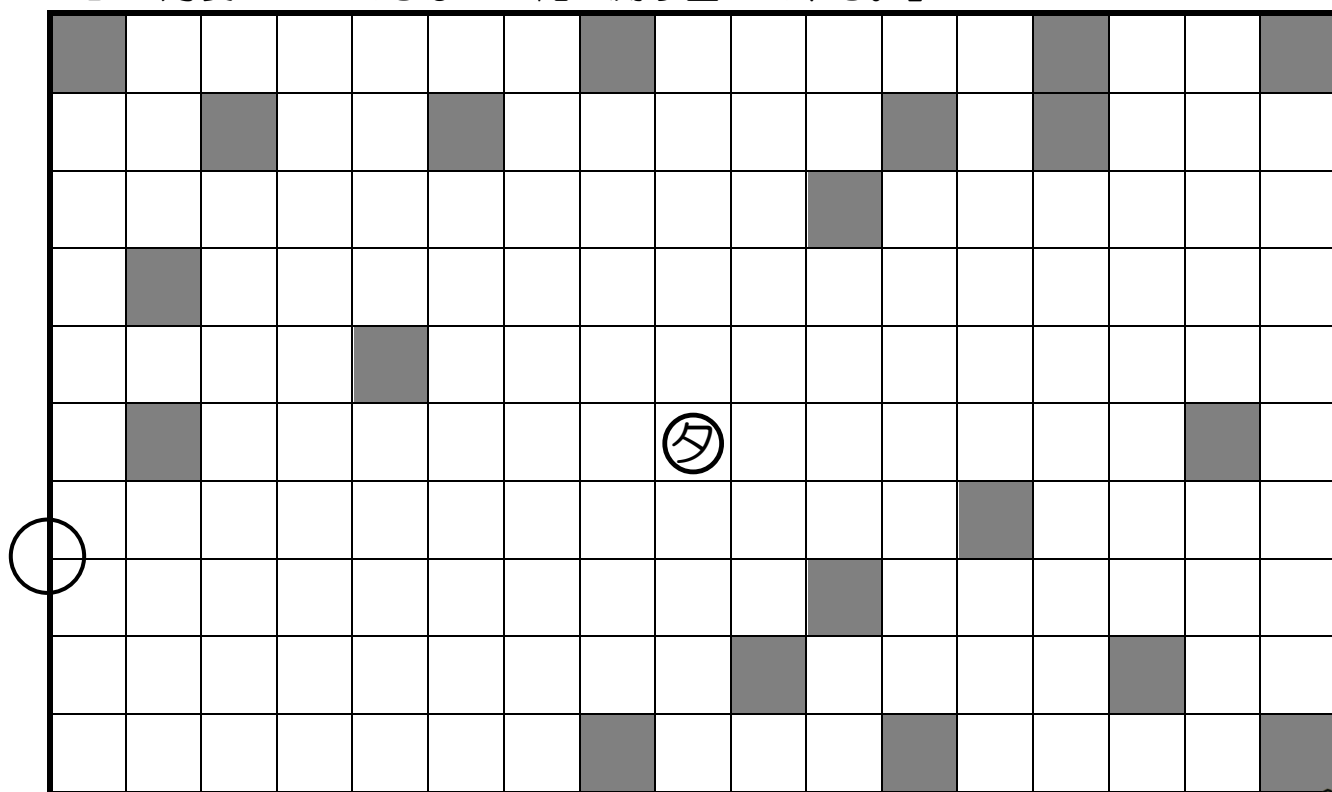
<EP3：今日も何かを忘れてる。昨日の反省すらも。>

「ユウタ、また忘れたの!？」ユウタは肩をすくめて笑う。「えー、昨日の夜までは覚えてたんですけど〜」
筆箱を忘れる。宿題を忘れる。時には、自分のカバンすら持たずに登校してくる。“忘れ物は俺の個性”
そう言っでは照れ笑いをするけれど、机の下には誰かが貸したノート、ロッカーには借りた傘。
ユウタの周りだけ、モノが渋滞していた。

WANTED



「心の角度がズれてるな……俺が測り直してやる。」



弾丸：30° ,45° ,55° ,60° 75°



数ヶ月後。

小さなカートを引く少年が歩いている。「はい、えんぴつ忘れた子ー、ここにあるよ。」“忘れ物王”は、いまや“教室のよろず屋”。友達の忘れ物を予測して、なんでも揃えて持ってきてくれる。ピストルズたちが囁く。「なあキスタ、あいつ…もう何も忘れてないぜ？」キスタは微笑む。「いや、忘れてるさ。“忘れん坊だった昔の自分を”な。」



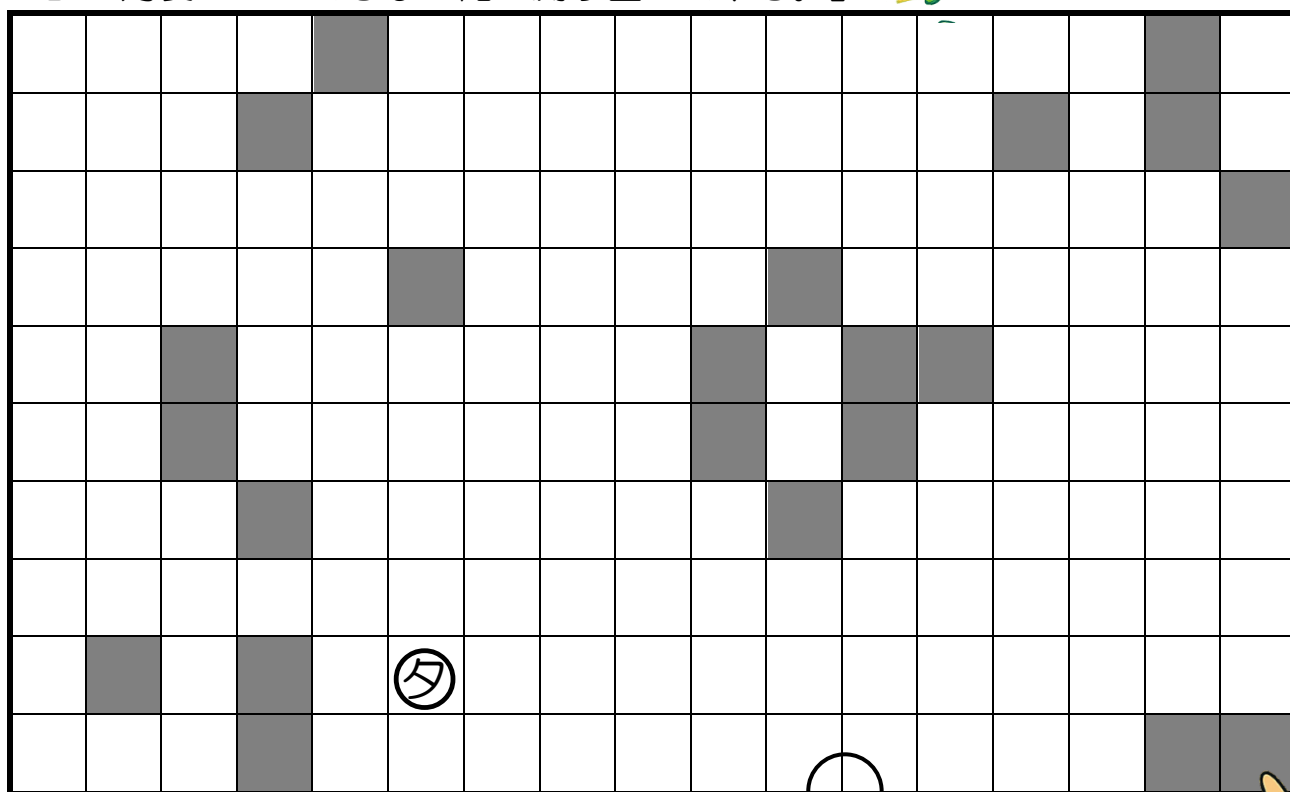
<EP4: 彼女の時計には“自分の時間”だけ>

会社の朝礼。点呼を終えた瞬間、ドアが開く。

「おはようございます〜！」息を切らしながら入ってくるのは、広報部のアヤ。明るいけどとにかく時間にルーズ。ランチも、会議も、集合写真も、いつも最後に「ごめん！」と登場する。その笑顔に周りには許すけれど、みんなのスケジュール帳には小さく書いてある。“アヤ、+15分見込み”…



「心の角度がズれてるな…俺が測り直してやる。」



弾丸: 25° , 40° , 65° , 70° , 80°



数ヶ月後。

教室の時計の針が、8時半を指す。「みんな、おはよう！」黒板の前に立つ女性—そう、あのアヤだ。いまは小学校の先生になり、“子どもの時間”に寄り添っている。プリントを出し忘れる子。問題が解けなくて泣く子。アヤは言う。大丈夫。焦らなくていいよ。時間ってね、人の数だけ流れ方があるんだよ。」…

「長針と短針の角度…今は完璧だな。」

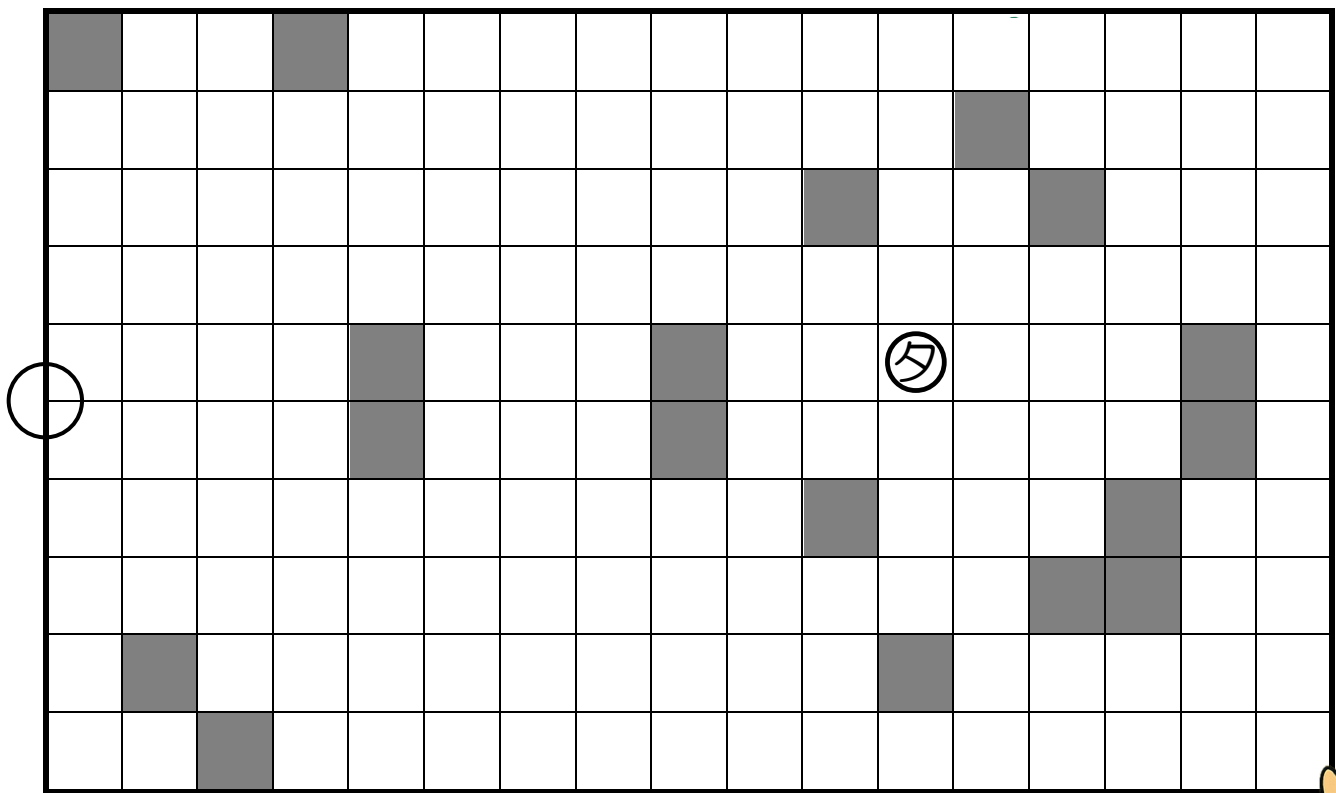


＜EP5：行列は俺以外を待たせるためにある＞

週末のスイーツフェア。行列は店の角を曲がって、さらに続いていた。「うわ、また並んでる…まあ、いいか。」カズは列の脇をすり抜け、さりげなく途中に割り込んだ。「え、ちょっと……！」と後ろの女性が言っても、「あ、いいお天気ですね～」と笑顔で返す。彼の信条はシンプルだった。“並ぶのは人生の無駄。”



「心の角度がズレてるな……俺が測り直してやる。」



弾丸：15° ,35° ,45° ,65° ,75°



数か月後。

カズは今“行列の専門家”になっていた。フェス、遊園地、パンケーキ屋—どこにでも現れる男。マイクを片手に笑顔で叫ぶ。「今の待ち時間は、笑顔で5分短縮できまーす！」待ち時間を楽しませる“行列パフォーマー”として人気沸騰。「待つ人の顔が笑顔に変わる、最高だぜ！」
「並ぶ角度…見事に水平だ。」



<エピソード>

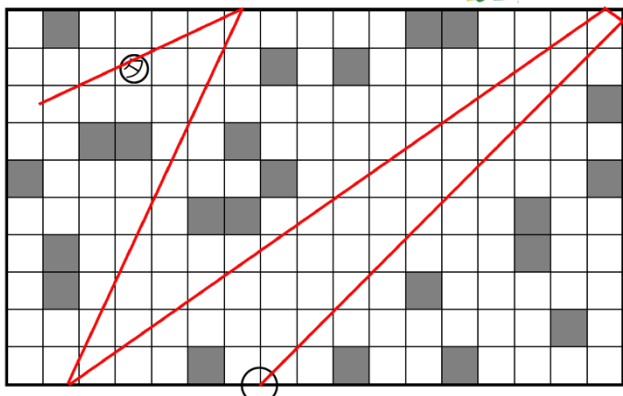
ブソード・キスタはいつものように、スコープを覗^{のぞ}いていた。「もう、撃^うつ相^あ手がいねえな。」ピストルズがひょこひょここと肩^{かた}に並^{なら}ぶ。「みんな、いいヤツになっちまったもんな!」「仕事^{しごと}なくなるぜ、ボス!」キスタは笑^{わら}いながらサングラスを^あげる。「いいんだよ。心^{こころ}の角^{かく}度^どがまっすぐなら、撃^うつ必要^{ひつよう}はない。」アナウンスの残^{ざん}響^{きやう}。駅^{えき}伝^{でん}の声^{せい}援^{えん}。子^こども^{ども}の笑^{わら}い声^{こえ}やチャイムの音^{おと}。行^{ぎやう}列^{れつ}の賑^{にぎ}わい。それらがすべて、ゆっくりとキスタの^{みみ}耳^{みみ}に届^{とど}く。「俺^{おれ}たちの出^で番^{ばん}は、もう少^{すこ}し先^{さき}かもな。」

でも一^せ世^{かい}界^{かい}にはまだ、“ちよっとズした角^{かく}度^ど”が^{のこ}残^{のこ}っている。
だが、それでいい。角^{かく}度^どがある限^{かぎ}り、彼^{かれ}らの物^{もの}語^{がたり}も終^おわらない。



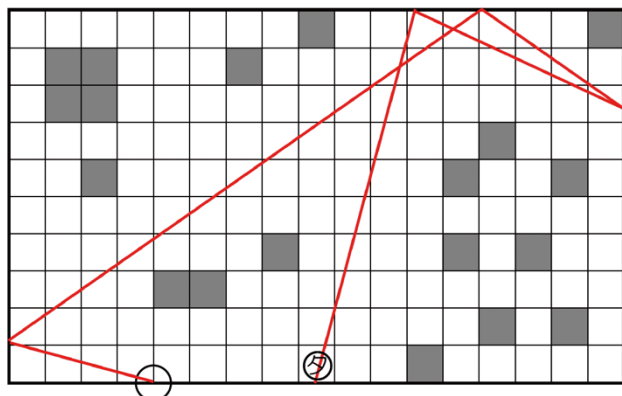
きみょう しゃかく だい ぶ かいとう
 <ブノード・キスタの奇妙な射角 第2部 解答>

EP 1



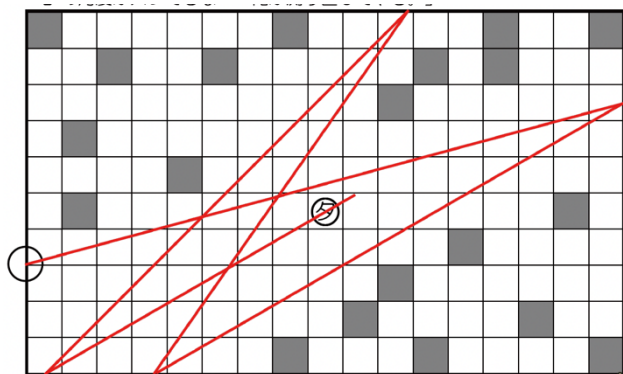
弾丸: ⑤25°, ③35°, ①45°, ②50°, ④65°

EP 2



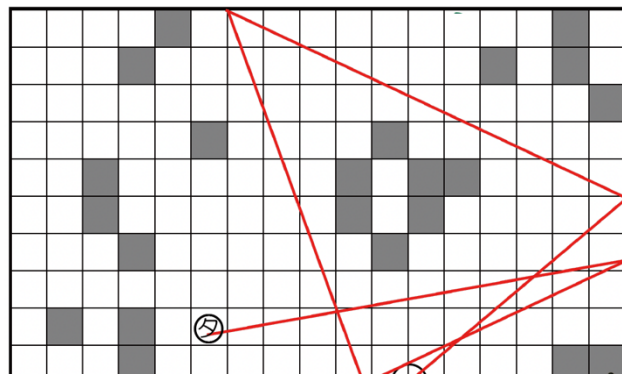
弾丸: ①15°, ③35°, ②55°, ④65°, ⑤75°

EP 3



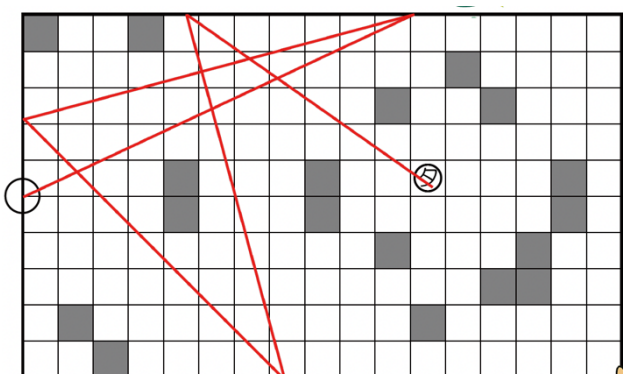
弾丸: ⑤30°, ④45°, ③55°, ②60°, ①75°

EP 4



弾丸: ④25°, ①40°, ②65°, ③70°, ⑤80°

EP 5



弾丸: ②15°, ⑤35°, ③45°, ①65°, ④75°